

視 野

西田 保裕

滋賀医科大学眼科学教室

専門別研究会「視野」は、日本眼科学会総会場である仙台国際センターで5月23日の午前に開催された。一般演題10題と、後半には教育講演である「視野検査を理解するために」を4人の演者で担当し、大変充実した研究会となった。当日、多数の出席者となり、世話人として大変満足している。各演題について、発表順に紹介する。

一般演題 セッション1

座長 前田 修司(前田眼科)

1. 「眼底視野検査における固視の記録および解析」

村田 豊隆, 他(滋賀医大)

演者らが開発した固視ずれを追尾できる自動眼底視野計を用いて、眼底視野検査中の被検者の固視ずれを計測したものである。被検者の検査中の固視は良好であり、5分間の検査中にほとんどの被検者では疲労による固視の不安定化は認められなかった。しかし、刺激視標を認知した場合、視標呈示開始から約0.5秒後をピークにして固視動揺が顕性化し、その後徐々に安定化し1秒後には定常状態に戻る傾向があり、興味深い結果である。

2. 「自動動的視野計における視標速度と年齢との関係について」

橋本 茂樹, 他(近畿大)

演者らの施設で開発している自動動的視野計での、適切な視標速度を決定するための発表であった。周辺のイソプタでは、視標速度に影響は受けにくかったが、中心イソプタでは速度が速くなるにつれて狭くなる傾向があり、中心では速度の影響を受けやすい結果であった。また、その影響は高齢者ほど著明であった。このため、最適な視標速度は周辺では秒速6°、中心では秒速2°が適していると結論した。自動動的視野計測の意義についての質問や、年齢による応答潜時についての質問があった。

3. 「コンピュータを用いた傍中心視力の測定」

西田 保裕, 他(滋賀医大)

P cell系の視機能を評価する方法として、コンピュータでの視標の自動呈示により簡易に傍中心視力を計測した発表であった。3名の正常被検者の結果では、偏心1°で視力は0.7以上、偏心5°では0.4~0.6、偏心10°でも0.2~0.4と意外に傍中心視力が良好であることを再認識した発表であった。今後の、臨床応用が期待される。また、今回の結果と黄斑円孔の視力不良例との関係についての質問や、視標呈示時間についてのコメントがあった。

4. 「M-CHARTS®を用いた変視症の経過観察—黄斑部網膜上膜について—」

有村 英子, 他(近畿大)

発表者の施設で開発され、臨床的にも変視症の定量化が可能なM-CHARTSを用いた黄斑上膜での臨床研究であった。眼底写真から黄斑上膜により生じた網膜の収縮を網膜血管の偏位により計測し、M-CHARTSによる変視症の程度との関連を解析した。視力や網膜感度に比べ、M-CHARTSは黄斑上膜の網膜の偏位を有意に反映しており、黄斑上膜の病態をより忠実にとらえていると結論した。変視症は網膜が一定の傾向で偏位するより、不整に偏位する方が顕性化するというコメントがあった。また、血管移動の計測法について質問があった。

5. 「両側後頭葉梗塞による両側性同名半盲のPETによる検討」

溝口 正一, 他(東京医歯大)

2例の両側性同名半盲患者の糖代謝と脳血流量をPETで計測し、黄斑回避のメカニズムを検討した発表である。いずれの症例もMRIで後頭葉内側に梗塞が認められ、PETでも後頭葉内側に血流の低下が認められた。しかし、黄斑回避を示した2例とも後頭葉後端での血流および糖代謝は温存されており、この部位での機能的温存が黄斑回避のメカニズムを説明できる所見であると結論した。このような症例でのfunctional MRIでの検討の可能性について質問があった。

一般演題 セッション2 座長 藤本 尚也(千葉大)

6. 「自動視野計 Octopus 301 の使用経験」

山本 肇, 他(近畿大)

自動視野計での検査中の頭部動揺の問題を解決するために、視野計本体が回転し固視を自動追尾するシステムの有用性についての発表であった。この装置では80%の被検者で頭部動揺により生じた固視ずれを自動的に監視・補正が可能であった。手動で頭部補正を行った従来の視野計測と比較してもその検査結果は同等であり、新しい固視監視装置の有用性が示された。今後の普及を期待したい。

7. 「くさび形の耳側視野欠損を示した10例の臨床所見」

山崎 斉, 他(オリンピア眼科病院)

くさび形の視野変化を呈した症例の臨床的特徴を述べたものである。視神経乳頭所見として高頻度に認められたものは、近視性の視神経乳頭傾斜、鼻側の視神経乳頭の辺縁不鮮明、視神経乳頭陥凹で、約30%に鼻側視神